

(1) 単元名：詩を読もう

(2) 本時の目標： 声の表現を考えながら、詩を読もう。

南城市立百名小学校。沖縄県島尻郡に位置する。全校児童182名、1クラス約30名前後の学校である。

現任の棚原久校長の前任が、国頭村の佐手小学校であったことから、ここ百名小学校でも「学びの共同体」の理念による学校づくりと授業づくりに挑戦しているとのこと。

これまでの学校づくりから、これから生き抜く子ども達のための学校づくりへの挑戦である。

学校の第一印象が「静かできれいな学校」である。校門から校舎入口まで整然としていて、校舎に入ったら児童の靴箱があるがどれもきれいに整頓されていた。美しい！

棚原校長が島尻で頑張っているとうわさを聞いて、私も気にはかけていたのですが、やっと学校訪問がかないました。わたしの心の中で「期待と不安」が交差する、一番楽しみの学校訪問である。



4年1組 担任は定臨の教師であるとのこと、本日の授業公開にもしっかり足を運び自分のクラスの子どもの様子を観察していた。教室は整然とされている。深い学びは、整然とした教室でしか生まれない。煩雑な教室では子どもの言動も雑になり、いわゆる落ち着きのないうつなになってしまう。写真①見よこの教師のこだわりを。写真②、教師が互いに教室を開く。公共性の理念である。教師の専門性を高める一番の近道は互いの授業を見せ合うことである。



授業のいい、悪いではない、どんな授業も「子どもの学び」がどうであったかに視点が向けられなければならない。素晴らしい教師の学習指導は教師個人のものにしかならない、しかし、子どもの学びの力は一生この子の財産として身に付けられていく。今「できる、できない。」より、教室の子ども達が互いに支え合いながら、困難な課題にどう向き合っていくか、チーム（グループ）で課題解決や、新たな創造に向かう子ども達を育てたい。目先の「できた、できなかった」、得点や平均点より先に大切にされなければいけないことがある。これから生きぬく子ども達のために。…「21世紀の学校に求められるものとは・・・。」OECDのPISAの調査の目的やその後の提言をぜひ一度ご確認いただきたい。フィンランドは教育における競争をやめたから「世界一競争に強い国になった。」その国で大切にされていたことは何だったんだろう。



10:40 教師の詩の音読を目をつぶって聴く。教師の範読後の話を聴く子ども達の眼を見てほしい「眼差し」という。この眼のできる学級は「聴き合う」がほぼ成立する。担任の日常の「聴き合う」学級づくりへの心がけ1つが鍵となる。言い合うのではなくあくまで「聴き合う」にこだわる。授業者は、この後子ども達の感想を共有する。「やさしい、ゆっくり、わかりやすい、ききとりやすい。」等であった。子どもの発言の後に「なぜそう思ったのか？」理を問うてみたかった。同じ発言でも理由が異なる場合は多々ある。・・・そこが面白い。



10:47 めあてを提示。学芸会ナレーターの例 10:53 3つのテープを聴く。→グループへ



方言音読のテープを3本聞くと、子ども達はいろんな感性で聴き入る。ペアやグループでぼそぼそつぶやきが起こる。「おもしろい、どろぼうみたい、早い、」この子ども達の感性の違いをぜひペアやグループで共有させたかった。違いがあり、正解のない問いに学びは発生しやすい。「何でそう思ったの？」心がけて使いたい。



11:00 グループへ



なぜ、小グループの活動を取り入れるか？3枚の写真がすべて物語っているように思える。子ども達の表情を見てほしい。日常の一斉指導の中ではなかなか見ることはできないのではないだろうか。一斉指導では、およそが、教師の「話を聞かされて、書かされて、覚えさせられて、できるか試されて、できなければ問題のレベルを下げてできるとし、」授業進行のほとんどがわずかな数人のできる子の発言で進められ、弱い子や発表が苦手な子が置き去りにされていく。上の3枚の写真はどうか？他のグループもほとんどこのような状態です。この中には弱い子や発言が苦手な子もきっといると思います。しかしなぜこのような笑顔でできるか？・・・一番大きな要因として「仲間と一緒にやっていること。」である。手を挙げて→指名されて→起立して→基本話型等での手続きやシステムもいらぬ、大きな声でなくても話せる距離、目線を感じながら分かり合える距離だからである。子どもの笑顔は「安心」「楽しい」の心の現れである。決してふざけではない。



《 「言い合う」か『聴き合う』か？ 》

小グループで音読を工夫するがテーマである。グループでの読み方を決めている。「学び合い」よりも「話し合い」決め事の側面がある。最初は穏やかであったグループだが、やがて「こう読みたい。」「こんながいい。」等といわゆる「言い合い」になってしまったシーンである。



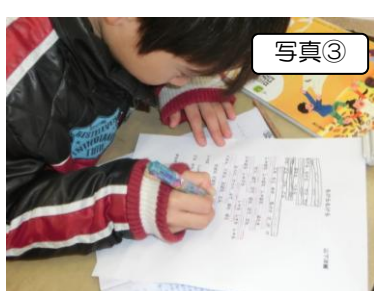
《 ケアの必要性 》

左の男の子、グループ活動中に気になる仕草を見せる。ちょっと落ち込んでいる？しばらく2～3分続く。困っているのである。要因は私も把握できなかったが間違いなく困っているのである。

ケアはこのような子どもを見落とさないことが肝心である。右写真、いつの間にか笑顔で仲間と溶け合っていた。おそらくグループ内の誰かが声をかけてくれたんだろうと察する。「仲間に支えられる仲間である。」男の子の心を見つめたい、ほくに気遣ってくれた友達をどう思うだろう。この子が困った顔をした仲間を見つけたときはどんな行為に出るだろう。

11:20 一人で読みたい子

《2枚の写真》



読み終わった後「もけら」は「助けて」だつつぶやいた。最高の共有の問いを提供してくれていた。

「なぜそう思ったの？」ペアやグループで一人の子の「なぜ」を共有する。

写真③の男の子、グループ活動にはいると、周りには目もくれず音読のための記号を書き始めた。しかしこの僕なりの工夫が取り上げられることはなかった。写真④、4年生の休み時間の様子である。みんなで学び合っている、体育の課題なのだろうか？上手な女の子を呼んできて手本をやってもらっていた、呼ばれた女の子も気軽に見せてくれた。誇ったり、見下している様子は全くうかがえなかった。素敵な日常が想像できるクラスである。

Y先生、ありがとうございました。非常勤務の教師と聞いてびっくりしました。すごい落ち着きでした。「学び合う学び」の授業にはゆっくり慣れていってください。だんだん「学び」って何？が見えてくるようになります。先生の立場上、担当する学級担任との情報の共有はとっても大切です。素敵な授業に感謝！